

「祝！同窓生が教授就任」

この度、2期生の徳嶺譲芳先生が杏林大学医学部麻酔科学教室の臨床教授に、6期生の仲村輝也先生が国際医療福祉大学医学部心臓外科学の主任教授に就任されました。我々同窓会会員にとっても大変喜ばしいニュースですので、今後の抱負について寄稿していただきました。

臨床教授就任のご挨拶

～中心静脈穿刺の医療事故ゼロを目指して～

杏林大学医学部麻酔科学教室 臨床教授 徳嶺 譲 芳 (2期生)



平成29年4月1日、杏林大学医学部麻酔科学教室の臨床教授を拝命した2期生の徳嶺譲芳(とくみね じょうほう)です。麻酔が専門ですが、中心静脈穿刺CVC (Central venous catheterization) の医療事故を防ぐための取り組みを

ライフワークとしています。以下が活動の概略です。

- ① 日本医療機能評価機構のCVC講習会の委員
CVC講習会は年4回の定期開催で、丸一日かけて超音波ガイド下中心静脈穿刺のスキルと中心静脈穿刺の医療安全について学びます。
- ② 医療安全全国共同行動支援部会Ⅲb (中心静脈穿刺) の委員長
定期刊誌「医療安全レポート」の中心静脈の安全について、2か月毎に記事を書いています。
- ③ 日本医学シミュレーション学会の理事およびCVC委員会の副委員長
本邦唯一の中心静脈穿刺のインストラクター制度を立ち上げました。また、そのテキスト「CVCインストラクターズ・ガイド (現在、第3版)」の作成と改訂を行っています。
- ④ 日本麻酔科学会の安全な中心静脈穿刺カテーテ

ル挿入と管理の手引き改訂委員

「安全な中心静脈カテーテル挿入と管理のプラクティカルガイド2017」の作成に関与しました。現在、英文化の作業を行っています。

- ⑤ 日本医療安全調査機構CVC専門部会の委員
平成29年3月に発行した「医療事故の再発防止に向けた提言 第1号 中心静脈穿刺合併症に係る死亡の分析—第1報—」の作成に関わりました。

…………… * …………… * …………… * ……………

超音波ガイド下中心静脈穿刺のセミナーを年間30～50回行っています。外部の活動だけでなく、所属の杏林大学でも活動しています。昨年から研修医教育に中心静脈穿刺の技術認定を導入しました。実技試験が難しい(第一回目試験の合格率は50%)ので、研修医は、夕方にシミュレーションラボで自主的にトレーニングを行っています。本年度も、今月ようやく最終合格者(再々試験)がでて約半年の長い試験期間が終了しました。

学術的な仕事としては、Medicine (Baltimore) という国際誌のEditorial Board Member (Cardiovascular Section) をしています。

冒頭に掲げた中心静脈穿刺の医療事故ゼロを目標に頑張っています。皆さま、ご支援のほどお願い申し上げます。

2018年新年会のご案内 (2期生)

2018年の医学科2期生新年会開催につきまして、以下の通りご案内申し上げます。今年は卒業30周年ですので、多数の皆さんのご参加をお待ちしております。よろしくお願いいたします。

- 日 時：2018年2月3日土曜日 午後7時～
- 場 所：ロワジールホテルスパタワー那覇 2階宴会場 (那覇市西3丁目2-1)
電話098-868-2222
- 会 費：10,000円
- 幹 事：山城 哲・石川 守・徳田安春
- 問い合わせ先：E-mail：yasuharu.tokuda@gmail.com

祝！ 同窓生が受賞

グローバルヘルス合同学会にて
日本熱帯医学会より本学教授がダブル受賞

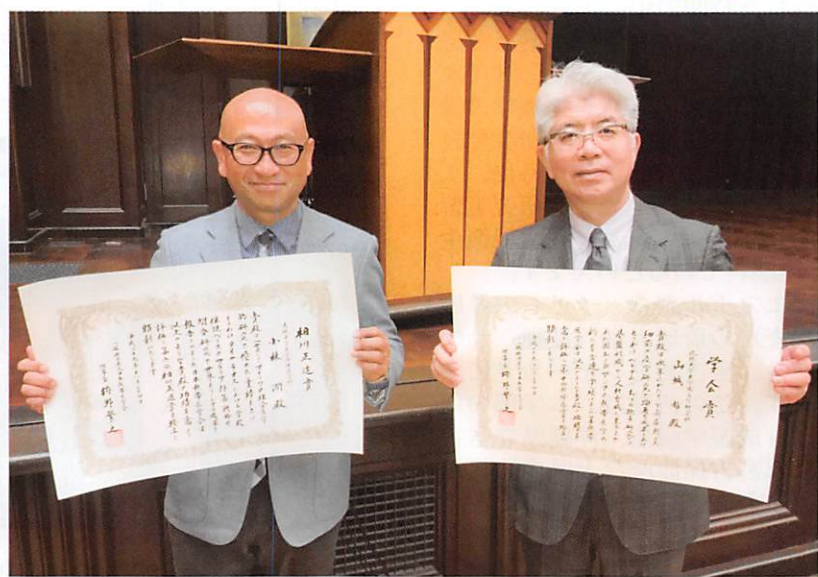
山城 哲 先生 (第2期生)

小林 潤 先生 (第4期生)

11月24日に東京大学本郷キャンパスで行われたグローバルヘルス合同学会にて、医学研究科細菌学講座の山城哲教授、保健学科国際地域保健学分野の小林潤教授が熱帯医学会から表彰されました。山城哲教授は2004年に本学会に所属する研究者によってなされた熱帯医学に関する顕著な業績を讃えるために作られた学会賞で14人目の受賞となりました。「細菌の疫学研究で顕著な成果をあげ、とりわけベトナムにおける拠点研究では基盤形成から人材育成に至るまで我が国およびアジアの熱帯医学の新たな方向性を示し続けた」ことが受賞理由となりました。小林潤教授は故相川正道博士のマラリア学における功績を記念して、マラリア学の発展に寄与した研究・業績に対して日本熱帯医学会が表彰する賞として2012年に設定された相川正道賞の6人目の受賞となりました。受賞理由は「一貫してマラリアの社会医学的研究で優れた業績を上げとりわけタイやラオスにおける学校保健ベースのマラリア対策戦略の開発研究で世界をリードする成果を報告した」ことです。

表彰式と受賞講演は東京大学の安田講堂で行われ多くの聴衆が駆けつけました。学会は3日間で1,500人以上の参加者があったことが報告され、熱帯医学をはじめ、国際保健学、渡航者医学の3つの面からグローバルヘルスについて活発な討議がなされました。

日本熱帯医学会は1959年に発足し、1972年に日本医学会へ64番目の分科会として加入している伝統のある学会の一つです。また世界熱帯医学連盟の理事国でもあり世界に向けた発信も重要な役割を背負っています。琉球大学は学会設立以来4回大会を招致してきており2009年には50周年記念大会を沖縄コンベンションセンターで開催するなど学会で重要な役割を担ってきました。今回のダブル受賞において学会への貢献がさらに期待されているなかで、2019年には60周年記念大会が山城哲教授のもと沖縄にて開かれることが今回正式に決定しました。今後この沖縄において当分野の研究・教育の発展がますます内外から期待されています。



本学同窓会副会長挨拶

琉球大学同窓会の活動にご協力をお願いします

琉球大学医学部附属病院がんセンター長・診療教授 増田昌人 (医学科2期生・琉大36期生)



昨年7月23日に、平成28年度琉球大学同窓会定期総会が開催され、琉球大学同窓会副会長に選出されましたので、ご報告いたします。

私と琉球大学同窓会との関わりは、英国留学から帰国直後の1999年5月に遡ります。職場復帰して数日後に、琉球大学同窓会評議員(後に副会長)

で元沖縄県教育長の津留健二先生から電話があり、「来年、母校が開学50周年を迎えるに当たり、同窓会としてもその記念事業の資金造成に協力したい。ついては、チャリティ茶会を開催したいが、手伝ってくれないか。」との内容でした(津留先生は琉大4期で初代自治会長であり、琉球大学の“Legend”のお一人ですが、同じ茶道裏千家淡交会沖縄支部会員、岳父の琉大での教え子でもあり、私はその娘婿ということで何かとご指導をいただいていたので、私なら断らないとお考えだったのでしょう)。

大先輩(私は琉大36期)からのお声掛けだったので、その日から事務局として働きました。流派を超えて、茶道を学んでいる全ての琉大の同窓生をお誘いし、津留実行委員長長のリーダーシップのもと100名以上の同窓会会員の協力が得られました。半年後の1999年11月21日に、歴代の学長や名誉教授の先生方のご出席をいただいた茶会は成功裏に終わり、同窓会へ40万円の寄附を行うことができました。また、琉球大学同窓会主催で芸能祭、コンサート、ゴルフなど多くのチャリティイベントが行われ、750万円余りを同窓会に寄附しています。その他に寄附金等を集めて、最終的に6,500万円余りを琉球大学同窓会から琉球大学に寄附しています。

その後、私は2003年8月に第5代医学科同窓会会長となりました。琉球大学同窓会役員選考委員会の推薦をいただき、翌2004年7月からは琉球大学同窓会の評議員となりました。以後は、最も若い評議員として、総会時の駐車場の整理係や受付の名札係などを10年ほど務めました。また、琉球大学60周年記念事業、琉球大学同窓会創立50周年記念事業や同60周年記念事業、役員選考委員会などのお手伝いや委員を務めました。6年前からは、役員選考委員会の時に名前が挙がるようになり、同委員長やその周辺の先輩からも打診があり、昨年とうとう受諾することを決心しました。浅学菲才の身ではありますが、医学科同窓会の次は、琉球大学同窓会の発展に貢献をしたいと思っております。

琉球大学同窓会は、多くの医学科同窓会の皆様にはな

じみの薄い存在と思いますので、少し紹介をいたします。

琉球大学同窓会は、1954年12月4日に創立され、会員数は約78,000名(2016年5月現在)です。琉球大学同窓会は終身会費制をとっており、入学時(もしくは任意の日に)に入会金1万円、卒業時(もしくは任意の日に)終身会費1万円を納めることになっています。医学科同窓会と同様に、基本的には在学した学生は原則としてすべて入会することになっています。今年の新入生からは、入学時に入会金と終身会費の併せて2万円の納入をお願いしています。

琉球大学同窓会は、会長と5名の副会長、50名の評議員、そして事務局として事務局長始め4名の専従職員がいます。関東、関西、九州・山口、奄美、久米島、宮古、八重山の7支部があり、それぞれ毎年支部会を開催しています。支部会には、会長と副会長1名が必ず出席しています。また、医学科同窓会のように、かなりの学科や学部でそれぞれ同窓会が組織、運営されています。

同窓会の事業としては、7月の総会、支部長会、講演会、懇親会が一番大きな行事ですが、無料教員試験対策講座(4~8月)、「同窓会会報」の発行・送付(3月)、チャリティゴルフ大会(隔年)、10年毎の周年行事、大学の周年行事への協力等、とても多方面への活動を展開しています。

近年では、琉球大学岸本基金管理委員会事務局の運営があります。岸本正之さん(5期、英文科卒)から母校への寄附により「琉球大学岸本基金」(最終的には約7億円の基金を予定)が昨年4月に創設され、琉球大学の学生の教育等に使われることになっています。この基金創設は幸喜徳子同窓会会長の個人的なご尽力によるところが大きく、その経緯から私たち役員一同で全面的に協力をしています。さらに、卒業生から母校への寄附や様々な協力が得られるような場作りを行っています。

私が、医学科同窓会の皆様をお願いしたいことは、せっかく総合大学に学んだからには、医学以外の場で活躍している同窓の方々とも広く交誼を結び、活動の場を医療機関以外にも持っていただきたいということです。我々医学科同窓会も、1期生が卒後30年を過ぎ、いよいよ沖縄県の医療を実質的に担っている状況になってきたと思います。県全体の医療を考えると時には、医療界だけではなく、官界、(医学以外の)学界、経済界等の力が必要であることは言うまでもありません。

今後は、医学科同窓会の皆様も積極的に琉球大学同窓会の終身会費を納め、総会・懇親会にも出席していただき、沖縄県の官界、学界、経済界、文化・芸術界を代表する方々とも積極的に交流していただくことを希望します。